

文語日誌（平成二十八年七月二十五日）

東京古書會館古書市（愛書展ほか） 收穫品より

一「大日本思想史」井上哲次郎・平原北堂著

（敕語御下賜記念事業部、昭和十八年刊、定價二十五圓）

序には「水戸光圀によつて編纂された大日本史は明治維新の鴻業を完成したが昭和の我々も何か一つの事業を爲し遂げたい」とあり、それに相應しき内容となれり。

冒頭の「日本精神と教育敕語」は大御所井上哲次郎先生の執筆。「教育敕語の眼目と云ふべきは『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』」なる由。

本文は平原北堂氏の執筆。第一卷大日本建國史、第二卷日本神道史、第三卷日本哲學倫理思想史、第四卷日本武士道史、第五卷日本宗教思想史、第六卷日本社會主義史、第七卷日本精神の絶對解説書より成る。たとへば、廣瀬淡窓につきては、「老莊の學を説いたが決して其の弊に陥る事無く、反つて儒教以上に其の實を擧げて居る。彼は我が國體の本義を明かにし、幕末の大儒として恥づかしからぬ卓見を述べて居る」とす。

二「増補明治作文三千題」

（明治二十三年刊、和綴）

たとへば、「暑中休暇に付友人之故郷に歸るを送る文 例年之通り暑中休暇に付御歸省の由御雙親の喜悅愚察奉り候。隨而耐酒壹壺聊か餞儀を表し候。尙御不在中御寓所は及ばず乍ら注意致すべく候。」など。

三「吟劍詩舞道漢詩集（絶句編）」

（日本吟劍詩舞振興會、昭和五十一年刊、非賣品）

挿繪に笹川良一會長の「戦犯巢鴨獄中作」の詩あり。

『萬象森羅凡て是れ劇』

乾坤一字梨園に比す

人生五十喜悲の幕

勝敗榮光兩つながら存せず』

この詩に「連合國も今度の戦争で勝利を得たからと言つて手放して喜んではいけない。どこまでも勝者として裁くなら、その瞬間に復讐に見舞はれる種を自ら蒔くことになるだらう」といふ警告を附してマツカーサーに提出、拷問を受くるも屈せずと。

本書は日本篇と中國篇より成る。

冒頭に掲げられたる詩は空海の「後夜佛法僧鳥を聞く」

四「吟劍詩舞道漢詩集（律詩・古詩編）」

（日本吟劍詩舞振興會、昭和五十五年刊、非賣品）

冒頭には同會會長の笹川良一氏の詩あり。

「朝あしたに吟ゆふべじ夕ゆふべに舞あしたうて心身を練あしたり

禮節持きたし來きたつて互きたひに眞きたを養きたふ

世界は一家 皆我が友

願きたはくは斯道きたを興きたして人倫きたを正きたさん」

笹川氏、序に曰く、「吟詠・劍舞、詩舞には三つの長所あり。①魂の榮養劑になる。②ストレス解消劑になる。③からだの健康や美容に役立つ。」と。

小生瑞典に駐在せしとき、笹川氏來瑞せらる。瑞典王室關係者の歡迎パーティに小生も招かれ、笹川氏と握手の機會あり。氏は小柄なるも、眼光炯々たり。

氏は王室關係者より尊敬せられある如くに見ゆ。

五「作文良材」

（二二三館、明治三十四年刊）

たとへば熾仁親王の田原坂の碑より、「鹿兒島縣は西海に於て地最も廣く人最も勇にし西郷隆盛の名望世を蓋ふに至れり。海内の人士、其の進退を伺ひ以て安危を爲す。明治十年二月隆盛叛して熊本城を圍む。天皇震怒、兵を發して之を討つ。熾仁總督の責に任ず」と。

六「受験 漢文單語の整理」

（有精堂、昭和四年初版、昭和十六年三十八版、定價五十錢）

記憶すべき名詞の例。「鼻祖、始祖に同じ。人の生を享けるにあたり先づ鼻が出来、然る後耳目が出来るといふ」「字あざな」古は男子二十歳にして冠禮を行ひ始めて字をつけた。字を用ゐるは其の人を敬ふ爲である。」など。

七「日本儒學史」高田眞治著

（地人書館、昭和十六年初版、十八年三版發行四千部。賣價壹圓八十八錢、内八錢は特別行爲稅相當額）

廣瀨淡窓につきては、獨立學派として位置づけらる。「淡窓はもとより單なる老莊派でもなく、まして徂徠派でもなく、朱子學派でもなく、折衷派でもなく、その學風は淡窓獨自の學風を形成してゐる。即ち經學・老莊學を兼修し、詩人としても高名であり、教育家としても偉大である。」

高田眞治たかた しんぢ（一八九三年生れ）は、儒學思想學者、元東京帝國大學教授。大分縣宇佐町

生まれ。

八「名著漢文選 全」

(山海堂、大正十一年訂正再版)

文部省檢定濟、中學校漢文教科書。

日本漢文と漢土漢文、均衡を保つ構成となれり。

第一類教訓類

貝原益軒の慎思錄（慎思なる語は中庸に由來）。朱熹の近思錄（近思なる語は論語に由來）。

第二類史談類。

大槻盤溪の近古史談。唐の蒙求。

第三類歴史類。

賴山陽の日本政記。司馬遷の史記。

第四類紀行文。

竹添光鴻の棧雲峽雨日記。陸遊の入蜀記。

第五類文章類。

石川鴻齋撰の日本文章軌範。唐宋八家文。

九「日本文明史」大町芳衛著

(博文館、明治三十六年刊、定價四十錢)

帝國百科全書シリーズの第百壹號。このシリーズの第壹號は高山林次郎（樗牛）の「世界文明史」なり。大町芳衛（桂月）は樗牛と大學同級なれば、本書には特別意欲的ならざるべからず。

たとへば、目下小生の關心を寄する江戸時代の漢學者につきては、「當時の漢學者はよく儒教を以て日本思想界の中心となし、餘力國史に及び漢文漢詩に及び、其詩文の力量は當時の歌人、國文家にまされり。且つ儒教は修身に始まり平天下に終る教なれば、漢學者にして政治家を兼ねたりしもの、兼山、蕃山、徂徠、白石、平洲、東湖、松陰など一々數ふるに違あらず。仁齋の古家、徂徠の古文辭學、白石の史學、一齋、山陽の漢文、茶山、星巖の漢詩など、今になほ生命ある也」とあり。

(平成二十八年八月二十日受附)